

野生の不思議な花、ヒガンバナ

故佐藤 武 ・ 久保田 正

ヒガンバナ（*Lycoris radiata* (L' Her.) Herb.）は、ヒガンバナ科、ヒガンバナ属の1種で、漢字では彼岸花と書きます。秋になり彼岸の季節になると、日本中の堤防、畔、道端、墓地、線路の際などに群生して一斉に真っ赤な色の花を見事に咲かせます。この時期の風物詩となっています。

別名として曼珠沙華（マンジュシャゲ）とも言われています。これは梵語（サンスクリット語）の曼珠沙に由来し、華は花のことで「天上に咲くという架空の赤い花」を意味します。本種は遠い昔に中国から入ってきたもので、古くて記録が残っていないため史前帰化植物の1種とされています。

また、本種には日本各地に多くの別名、地方名、方言等の呼び名が存在し、かこ（1999）によると、全国では600以上が報告されています（900にも達するという報告もあります）。因みに静岡県では36の呼び名が知られています。

ところで、著者の一人（佐藤 武）は、本種を自宅の庭に鉢植えして一年間に亘って観察して成育の写真撮影を行いました。このような観察例は、貴重と思われるので紹介します。その結果は、図1・①～⑧の通りです。それによると、9月に咲き終わり、10月には花が枯れ、次いで葉が出て来て、寒い冬を越し（この年の2月16日は雪の日）、5月に入ると葉が枯れて、9月には土が現れて何も無くなります。このように翌年の春まで葉が茂っている時には「花見ず」の時期です（図1・①～⑥）。そして花茎が出て花が咲くのです。この時期は「葉見ず」です。花の見頃は、1～2週間程度です（図1・⑧）。

このように「ハミズハナミズ」の別名あり、不思議な植物です。また、韓国では「相思華」と言われ、花と葉が同時に見られないことから「花は葉を思い、葉は花を思う」という意味があるそうです。

実は本種は、有毒植物で球根にはアルカイド系のリコリンやセキサニン等の有毒成分が含まれています。ここに含まれる大部分の澱粉自体は無毒なので昔の人は、この澱粉だけを取り出す工夫をして飢饉時の食料としていました。また、この毒を利用して水田や畑に穴をあけたりするネズミやモグラの害獣駆除にも用いられていました。

本種（赤）の花言葉として「悲しい思い出」のほか、「情熱」、「独立」、「あきらめ」などがあります。また、赤色以外の黄、白、桃、ピンクなどの色によっても花言葉の意味が少しずつ異なっています。

引用文献

かこ さとし（1999）：ヒガンバナのひみつ. かこさとし大自然のふしぎえほん 3, 小峰書店, 東京. 31p.



図1. 鉢植えのヒガンバナの成育変化

2000年10月～2001年9月の1年間の観察 図中の①～⑧は撮影の順番を、右下の数字はその年月日をそれぞれ示す（撮影：佐藤 武）。